

# Feel the JIHS **Plus**



## CONTENTS

- |  |   |
|--|---|
| 02 第40回日本環境感染学会総会・学術集会シンポジウム「JIHSでの取り組みについて」を開催                                  | 08 JIHS 功績&表彰トピックス                        |
| 03 第84回日本公衆衛生学会総会でJIHSの取り組みを発信～シンポジウムと展示ブースで活発な議論・交流～                            | 10 令和7年度感染症危機管理リーダーシップ研修〔長期〕              |
| 04 アジア臨床試験エコシステムの未来を描く国際シンポジウム"ATLAS-ARISE-PMDA International Symposium 2025"を開催 | 12 グローバルヘルス・フィールドトレーニングを実施しました            |
| 06 NETECとの連携強化のため、米国に使節団を派遣しました  | 13 国際感染症インテリジェンス研修を開催しました                 |
| 07 ワンちゃんが私のお部屋に遊びに来た！～初めての個室訪問～  | 14 NIGHM 夏季リトリートを開催                       |
|  | 15 日本 DMAT 創設 20 周年記念式典が執り行われました          |
|  | 16 国立感染症研究所の戸山キャンパスと村山キャンパスで「一般公開」を開催しました |

# 第40回日本環境感染症学会総会・学術集会 シンポジウム「JIHSでの取り組みについて」を開催

寄稿 危機管理・運営局 企画調整部 上級研究員 佐藤 瞳

7月11日、パシフィコ横浜にて第40回日本環境感染症学会総会・学術集会が開催され、齋藤智也部長、和田耕治次長の座長のもと、シンポジウム「JIHSでの取り組みについて」が行われました。感染症や健康危機に対する最新の取り組みについて、理事長、理事及び各担当者から報告が行われました。



国土 典宏理事長

冒頭では、国土典宏理事長より挨拶があり、JIHSが目指す方向性について示されました。続いて、武井貞治理事からはJIHSの概要について紹介があり、研究・臨床・国際連携・人材育成を柱とする機構の役割が説明されました。

日尾野宏美室長からは、感染症危機時に迅速な臨床研究を行うため、平時より医療機関や自治体と連携し感染症臨床研究の基盤を整備するための「感染症臨床研究ネットワーク(iCROWN)事業」の進捗が報告されました。研究実施機関は、2025年度には38施設に拡大し、研修・訓練を通じて、新たに発生する感染症に対する科学的根拠に基づく対策の実施や、企業等に向けた研究開発基盤の構築が進められています。

また、福田哲也専門職からは、「感染症危機管理リーダーシップ研修(IDCL)」について紹介がありました。IDCLは、感染症危機時に地域でリーダーシップを発揮できる人材を育成するためのプログラムで、公衆衛生・医療・組織マネジメント・調整・コミュニケーションなど幅広いスキル習得を目指しています。

さらに、石金正裕医師からは、アジア・アフリカ・南米に展開する11拠点を活用した国際連携と、新たに始まった「感染症国際研究拠点連携プログラム(J-GRID+)」の挑戦が紹介されました。国内外をつなぐコア拠点をJIHSに設置し、グローバルな感染症危機に備える体制を強化しています。

最後に、松澤幸正室長からは、災害発生時に被災地の避難所等での感染症対策を支援する「災害時感染制御支援チーム(DICT)」の取り組みについて報告がありました。2024年

10月にJIHS内に事務局が設置され、平時からの連携強化や体制整備が進められています。

本シンポジウムを通じて、JIHSが担う多角的な取り組みの全体像が共有され、感染症危機管理の重要性と今後の展望について活発な議論が行われました。



四柳理事、座長、登壇者たち

# 第 84 回日本公衆衛生学会総会で JIHS の取り組みを発信 ～シンポジウムと展示ブースで活発な議論・交流～

寄稿 危機管理・運営局 企画調整部 上級研究員 佐藤 瞳

国立健康危機管理研究機構 (JIHS) は、10 月 29 ～ 31 日にかけてグランシップ (静岡県) で開催された「第 84 回日本公衆衛生学会総会」に参加しました。JIHS は複数のシンポジウムへの登壇や展示ブースの出展を通じ、当機構の健康危機管理の展望について広く発信しました。

## シンポジウム 62

### 日本の健康危機管理の現状と展望 ～国立健康危機管理研究機構 (JIHS) の創立にあたって～

座長：藤田 利枝 (全国保健所長会)  
磯 博康 (国立健康危機管理研究機構  
グローバルヘルス政策研究センター長)  
演者：鷺見 学 (厚生労働省)  
眞鍋 馨 (内閣感染症危機管理統括庁 審議官)  
家保 英隆 (全国衛生部長会 / 高知県庁)  
國土 典宏 (国立健康危機管理研究機構 理事長)

健康危機  
管理の展望に  
ついて



JIHS の  
強みに  
ついて

## シンポジウム 2

### 新時代の感染症危機管理体制の構築と課題

脇田 隆字 (国立健康危機管理研究機構 副理事長)



## シンポジウム 12

### 感染症危機に対応する人材育成の現在地と目的地

座長：和田 耕治 (国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局)  
岩橋 慶美 (広島市 健康福祉局 保健部兼西区厚生部)  
演者：高岡 誠子 (一般財団法人 日本公衆衛生協会)  
福田 哲也 (国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局)  
西浦 博 (京都大学大学院 医学研究科)  
近藤 久禎 (国立健康危機管理研究機構 DMAT 事務局)

人材育成の  
展望に  
ついて



## 展示ブース

展示ブースでは、JIHS が推進する事業 (iCROWN、ARISE、J-GRID+、IDCL) について紹介しました。会期中、延べ 373 名もの来場者と直接対話する機会を得て、深い関心をお寄せいただきました。國土理事長も訪れ、来場者と交流しました。

展示ブース  
での  
活発な交流



(左から) 牧野室長、筆者、國土理事長、  
武井理事、和田次長

# アジア臨床試験エコシステムの未来を描く 国際シンポジウム "ATLAS-ARISE-PMDA International Symposium 2025" を開催

寄稿

臨床研究センター インターナショナルトライアル部 ARISE 事務局



10月3日、タイ・バンコクの The Okura Prestige Bangkok にて、ATLAS (Asian Clinical Trials Network for Cancers Project, NCC)、ARISE (ARO Alliance for Southeast & East Asia, JIHS)、PMDA (医薬品医療機器総合機構) の共同国際シンポジウム「ATLAS-ARISE-PMDA International Symposium 2025」が開催されました。武見敬三 前厚生労働大臣や大鷹正人 タイ王国駐箚 (ちゅうさつ) 特命全権大使にもご臨席いただき、各施設の関係者や JICA 等から 114 名、JIHS から 13 名が参加しました。ARISE は JIHS が感染症領域において、ATLAS は NCC ががん領域において、それぞれ主導するアジア地域の国際臨床研究ネットワークです。本シンポジウムは ATLAS 設立 5 周年を記念する節目として "Building a United Asian Clinical Trial Ecosystem" をテーマに開催され、日本を中心とするアジア臨床試験の未来を見据えて、産学官連携による臨床研究環境の整備・強化、研究協力の促進、規制調和等の様々な観点から活発な議論が行われました。

## セッション概要



フロアからの質問に答える武井理事

### ■ オープニングセッション

オープニングセッションでは、「革新的治療法と診断法：協働するアジアの未来構築」と題し、ATLAS 及び ARISE の成果と今後の展望、地政学的リスクを踏まえたアジア連携の理想像等が紹介されました。この中で JIHS 危機管理・運営局の武井貞治理事が登壇し、ARISE の成果と今後の展望、アジア連携の必要性を強調しました。

## ■ セッション 1・2 (ATLAS 企画セッション)

セッション 1・2 (ATLAS 企画セッション) では、MASTER KEY Asia や Project CAD などの多国間共同臨床試験の成果、疾患別研究体制や教育プログラムが紹介されるとともに、今後の課題として研究者主導治験の拡充、若手人材育成、専門委員会機能の強化、AI を使った翻訳自動レビュー報告書生成などのデジタル活用、国際共同研究の推進、「ドラッグロス」への対応等が挙げられました。



セッション3の座長と登壇者たち

## ■ セッション 3 (ARISE 企画セッション)

セッション 3 (ARISE 企画セッション) では、JIHS 臨床研究センターの杉浦 亙センター長が座長を務め、まず JIHS 臨床研究センターインターナショナルトライアル部の時田大輔部長が登壇しました。この中で ARISE ネットワークの現況を報告し、パンデミックへの備えとして ARISE を通じてアジアの臨床研究能力を

強化する必要性を強調しました。Q&A では感染症領域における ARISE ネットワークの強みを活かし、ICH-E6 (R3)、eConsent、DCT、Single IRB、AI 活用など、臨床研究を加速するために必要なインフラ整備について議論されました。

## ■ セッション 4 (PMDA 企画セッション)

セッション 4 (PMDA 企画セッション) では、PMDA と ASEAN 規制当局の連携をテーマに、PMDA アジア事務所を拠点とした共同ガイドライン策定、人材交流、規制調和等の取り組みが紹介されました。

## ■ セッション 5 (総合討論)

セッション 5 (総合討論) では、産学官連携によるアジア主導の臨床開発のあるべき姿が議論されました。JIHS 臨床研究センターインターナショナルトライアル部の Marlinang Siburian 上級研究員がパネリストとして本セッションに登壇し、ARISE を活用した企業主導試験や患者団体との連携の可能性について述べました。最後に、日本製薬工業協会の中路 茂氏が登壇し、アジア地域の規制調和と信頼性の高い臨床研究エコシステムに対して期待感を示しました。

## ■ クロージングセッション

### アジアが臨床開発のリーダーへ

クロージングセッションでは JIHS 国立国際医療センター 宮崎英世院長が登壇し、本シンポジウム全体を総括するとともに、「アジア地域で日本がグローバル臨床開発のリーダーとなる」との力強いメッセージを発信し、本シンポジウムは盛況のうちに閉会しました。



挨拶する宮崎院長

# NETEC との連携強化のため、 米国に使節団を派遣しました

寄稿

国際感染症センター 国際感染症危機管理対応推進センター

特任研究員 東島 紋子

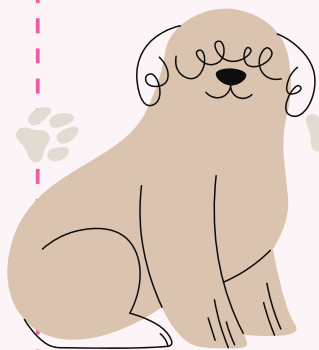
国際感染症センター（DCC）国際感染症危機管理対応推進センター（GIC）は、6月2～6日に米国の臨床感染症ネットワーク体制の調査、ならびに日米の臨床感染症ネットワークの連携強化を行うことを目的に、DCCセンター長の大曲貴夫、DCC GIC 運営室長の松澤幸正、企画調整部政策課調整室長の日尾野宏美の3名を米国に派遣しました。



視察先の一つであるネブラスカ大学医療センター（UNMC）は、2022年に日本でのエムポックス感染拡大への備えのため NCGM から4名の医師を派遣したことをきっかけに、相互の情報共有、専門家育成のための人材交流などの提携を含む協定書を締結しました。本視察では、JIHS 設立に伴う National Emerging Special Pathogens Training and Education Center（NETEC）との更なる連携強化のため、NETEC の2つの中核病院であるエモリー大学病院、ニューヨークヘルスベルビュー病院とも新たに協定書の策定を進めています。

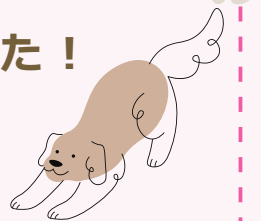
各病院の視察を通じて、ネットワークを活用した臨床研究の実施や、感染症危機時に即応可能な臨床研究体制の整備など、日本における臨床研究体制の強化に向けた有益な情報を得ることができました。また、NETEC が取り組んでいる国内外のパートナー機関への知見や経験の共有のためのワークショップや、国際搬送に係る訓練の知見を得られました。DCC/GIC は、引き続き、臨床感染症国際ネットワークの拡大や、国際連携強化に努めてまいります。





# ワンちゃんが私のお部屋に遊びに来た！

～初めての個室訪問～



寄稿

子どもの療養環境に関するワーキンググループ同

「こんにちは！」セラピードッグのみらいちゃんがお部屋で待っているお友達のところへ遊びにやってきました。「ふわふわ～ふわ～」「かわいいねえ、かわいいねえ」。ワンちゃんにたくさん話しかけておしゃべりも弾む時間でした。膝の上にちょこんと座り、ぬくもりを伝え合いながらたくさんの時間を近くで過ごしました。

セラピードッグイベントは今回で3回目を迎え、回を重ねるごとに「おさんぽ」「個

室訪問」などをメインイベントに加え、新たなチャレンジをしています。今後も継続的なセラピードッグイベントの開催を目指し、多職種チームで力を合わせていきます。



## 🐾 セラピードッグについて

国立国際医療センター病院では、2019年頃からセラピードッグの導入を検討しましたが、コロナ禍となり、対面での導入は実現しませんでした。しかし、オンラインイベントの形式を取り、日本レスキュー協会の犬たちとの交流を5年にわたって続け、「能登半島地震」後には実際に現地で活動した災害救助犬の様子を写真と共にご紹介いただき活動を継続してきました。5年越しの想いが届き、2024年にセラピードッグの訪問が実現しました。

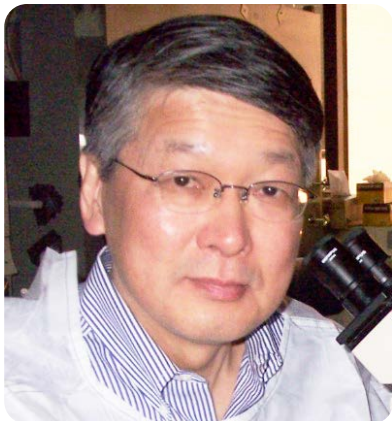
何も言わずにそっと寄り添ってくれる犬の存在は癒しとなり、また頑張る勇気を引き出し、心の支えとなることが期待されます。犬との時間は受け身になりがちな子どもたちがありのままの自分でいられる心の居場所を作ります。セラピードッグが持つ特別な力、そのぬくもりに触れる経験は他に代わる物のない癒しや安心を子どもたちの心に届けます。「また会いたい！」という気持ちは明日への頑張りを支える効果が期待されます。

日本レスキュー協会

<https://www.japan-rescue.com>



## 国立国際医療研究所 満屋裕明所長、 令和 7 年度文化功労者に選出されました



国立国際医療研究所長  
満屋 裕明

国立国際医療研究所の満屋裕明所長は、感染症学の分野において、世界初となるエイズ治療薬の開発に中心的な役割を果たし、薬剤耐性発現の機序の解明や新たなプロテアーゼ阻害剤の研究・開発などを通じて、HIV 感染症に対する治療法の基礎を築きました。満屋所長は AIDS との闘いにおいて感染を恐れず独力で評価系を確立、世界で最初の AZT を始めとした 3 種の治療薬を次々と開発しました。2003 年には自身 4 番目となる AIDS 治療薬を発見・開発するなどの業績を挙げており、その功績は誠に顕著です。

満屋所長はこれらの成果により、HIV 感染症を「死の病」から「治療可能な慢性感染症」へと変貌させる礎を築き、感染症研究の発展に大きく貢献しました。

このたびの顕彰は、当機構にとって大変喜ばしいことです。顕彰を心よりお祝い申し上げます。

## 国立国際医療研究所 植木浩二郎 糖尿病研究センター長、 紫綬褒章を受章しました



国立国際医療研究所  
糖尿病研究センター長  
植木 浩二郎

国立国際医療研究所の植木浩二郎 糖尿病研究センター長が、令和 7 年秋の紫綬褒章を受章しました。

植木センター長は、糖尿病研究の分野において、インスリンの多様な作用メカニズムや、その機能不全がもたらす合併症・併存疾患の発症の仕組みの解明に取り組んできました。これらの研究成果は、糖尿病の病態理解や新たな治療法の開発に大きく寄与しています。

受章にあたり、植木センター長は次のように述べています。

「この度の受章は望外の喜びであり、これまで共に研究を進めてきた多くの方々に深く感謝しております。この受章を機に、さらに研究を発展させ、臨床への橋渡しを通じて糖尿病の克服に近づけるよう努力してまいります。」

このたびの受章は、当機構にとって大変喜ばしいことです。ご受章を心よりお祝い申し上げます。

## 小井土事務局長、 「救急医療功労者表彰（総務大臣表彰）」を受賞しました

危機管理・運営局 DMAT 事務局の小井土雄一事務局長が令和7年度「救急医療功労者表彰（総務大臣表彰）」を受賞しました。この表彰は、救急医療や救急活動の発展に長年にわたり貢献した個人・団体に対し、総務大臣から直接贈られる日本の救急分野で最も権威ある表彰のひとつです。

小井土事務局長は、日本医科大学救急医学教室で医局長として救急診療の現場に立ち、国立病院機構

災害医療センター救命救急センター長時代には重症患者対応やチーム運営に力を注ぎました。また、東京DMATの1期生として病院搬送前の救急現場でも東京消防庁と連携し、現場対応に携わってきました。加えて、救急隊指導医として長年教育に関わり、救急隊指導医委員会での制度づくりにも取り組んできました。

今回の受賞に当たり、小井土事務局長は、「この受賞は決して私一人の力だけではなく、これまでともに現場で活動してきた医療従事者や消防関係者、そして支えてくださった多くの方々のおかげだ。この名誉に恥じぬよう、今後も救急医療・災害医療の発展に向けて努力していきたい」と感謝と抱負を述べています。



## 歯科・口腔外科診療科長 丸岡豊医師、 「MDF 医工共創アワード JAPAN」にて特別賞を受賞しました



国立国際医療センター 歯科・口腔外科診療科長の丸岡医師が、大阪商工会議所主催の「MDF 医工共創アワード JAPAN」において「特別賞」を受賞しました。丸岡医師は、安井株式会社と共同で「骨に描けるペン」を開発。人体に安全なインクを用い、正確に細く、消えにくい線を描くことを可能にし、手術現場での利便性向上に大きく寄与しました。あわせて、共同開発企業である安井（株）も企業部門において「優秀賞」を受賞しました。

本アワードは、大阪商工会議所が全国を対象に医療機器開発支援プラットフォーム事業として「次世代医療システム産業化フォーラム（Medical Device Industry Forum : MDF）」で2003年から実施しているものです。本年は、医療従事者からの共同開発提案が累計1,000件に到達したことを記し、医工連携による医療機器開発・事業化に貢献した医師や企業を称えるため、「MDF 医工共創アワード JAPAN ～未来の医療をデザインする医工連携の最前線～」が行われました。

MDFの医工連携マッチング例会等を通じて事業化・製品化に至った74件の中から、医工連携の取り組みで成果を上げている新規参入型の企業5社をノミネートし、「最優秀賞」「優秀賞」「奨励賞」を決定しました。医工連携による医療機器開発に貢献した7名の医師に「特別賞」が授与されました。

令和7年度

# 感染症危機管理リーダーシップ研修 [長期]

寄稿 危機管理・運営局 企画調整部 上級研究員 佐藤 瞳

  
10月

## 対面研修

地域の感染症危機においてリーダーシップを発揮する人材に必要な知識の深い理解・定着を促すことを目的として実施

### 自治体 OJT (神奈川県)

10月1日より、神奈川県でOJT(On-the-Job Training)が開始されました。研修生は、神奈川県庁や保健所だけでなく、川崎市健康安全研究所や横浜市健康安全課でも研修を受けました。また、今回は滋賀県からの研修生もOJTに参加しました。神奈川県の体制を学ぶと同時に、滋賀県における人材育成の取り組みについて発表を行いました。



神奈川県健康医療局長 兼 未病担当局長 足立原崇氏との意見交換



10月3日 川崎市保健所 (左奥が研修生)



10月23日 秦野センター (左奥・右奥が研修生)

## 外部講義

外部講師による感染症危機の事例やリーダーシップに関する講義とグループディスカッションを実施

### 「感染予防」

講義では、最新の感染症対策の動向が示されました。「飛沫感染」「空気感染」という用語は今後数年で使われなくなる可能性があり、「空気を介する伝播」という新たな概念への移行が



講師：矢野 邦夫 先生  
(浜松医療センター 感染症管理特別顧問)

## 厚生労働省委託事業として、感染症危機管理の領域で リーダーシップを発揮できる人材を育成するための研修を実施しています

JIHS では、厚生労働省委託事業として、公衆衛生行政、医療提供体制、感染症疫学や臨床等に関する専門的な知見や経験を有する既存の多様な職種の感染症専門人材に対し、地域における将来の感染症危機への対応においてリーダーシップを発揮する人材として、感染症危機管理に必要な多様かつ分野横断的な知識やスキルの修得や維持・向上を図ることを目的とした研修を実施しています。今回は、令和7年度4月から開始された長期研修の10月の様子を紹介します。

Web サイトは  
こちら



見込まれています。換気を施設責任の中核とし、階層構造に基づく対策の重要性が示され、研修参加者は国際的な最新動向をいち早く学ぶ機会となりました。

### 学会総会

日本公衆衛生学会総会において、感染症危機管理リーダーシップ研修事業の説明と意見交換を実施

2025/10/29 (水)  
18:40~20:10

第84回 日本公衆衛生学会総会

第9会場：グループワーク(904) + Web

Web参加希望者は事務局にメールにてご連絡ください。URLをお知らせいたします。

#### 自治体職員対象 感染症危機管理リーダーシップ研修 事業の紹介と実践事例

進行：和田利枝 (JIHS)

- 開催の挨拶：厚生労働省
- 趣意説明：齋藤智也 (JIHS)
- IDCL 概要説明：佐藤隆 (IDCL事務局)

基調講演：藤田利枝 (全国保健所長会)

令和7年度 IDCL (長期) 研修生より

小林亮太 (長野県)・深田美穂 (神奈川県)

・豊田裕也 (東京都)・藤田大 (長野県)

・藤田大 (長野県)・阿部礼以遥 (横浜市)

・水村智也 (飯塚区)

実践交流会 + 質疑 + Web かつ

フリートーク：令和6年度 IDCL (短期) 修了生

・田邊裕 (名古屋市)・丸山純 (川崎市)

・開会の挨拶：齋藤智也 (JIHS)



## 第84回日本公衆衛生学会総会 自由集会

10月29日、第84回日本公衆衛生学会総会 自由集会「感染症危機管理リーダーシップ研修事業の紹介と実践事例」を開催しました。約40名（オンライン含む）が参加し、開催の挨拶を厚生労働省感染症対策課小澤主査、趣旨説明を JIHS 齋藤智也先生、基調講演を全国保健所長会の藤田利枝先生、実践事例を令和7年度長期研修生及び令和6年度短期修了生の計5名が行い、その後、令和6年度短期修了生のファシリテートのもと、闊達な意見交換が行われました。



自由集会参加者集合写真



令和6年度 IDCL (短期) 修了生

# 国際保健医療協力を担う人材を養成するための 現地研修プログラム、グローバルヘルス・ フィールドトレーニングを実施しました

寄稿

国際医療協力局 広報情報課

国際医療協力局では、グローバルヘルスを担う日本人材を養成する研修を毎年実施しています。今年は9月13～21日の9日間、21人がベトナムでの研修に参加しました。事前にJIHS内で講義と演習を行い、翌日にはベトナムに渡航してフィールド研修というプログラムで、ベトナムの医療施設の訪問や医療者たちとのグループワークを行いました。

フィールド研修においては、事前にホアビン総合病院から要望のあった3課題に対する介入策を提案する実践的な研修を企画・実施しました。グループワークではホアビン総合病院の医療スタッフと協業し、日越混成の3チームによるプレゼンテーションを行いました。また、JIHSの

拠点病院であるハノイのバックマイ病院や地域の医療センターへも訪問し、ベトナムの医療体制を学びました。

国際医療協力局は今後も、各種研修やセミナー等を通じて、国際医療協力分野における交流や人材育成の推進に貢献してまいります。



# 新たな感染症危機に備えるため、 国際感染症インテリジェンス研修を開催しました

寄稿

国立感染症研究所 感染症危機管理研究センター 危機管理企画部 吉見 逸郎



8月21日、厚生労働省「国際感染症危機管理対応人材育成・派遣事業」の一環として「国際感染症インテリジェンス研修」を国立感染症研究所で開催しました。外務省医務官やIDES\*研修生をはじめ、オンラインやオンデマンドでの参加も含め、約80名が参加しました。

研修では、齋藤感染症危機管理研究センター長による「国内のインテリジェンス情報集約体制」、インテリジェンス研究家（株式会社ラック ナショナルセキュリティ研究所 客員研究員）の上田篤盛氏による「海外派遣でのインテリジェンス情報収集」といった講義が行われました。感染症インテリジェンスの基礎を学ぶとともに、海外派遣時に必要となる実践的な視点や注意点を知る貴重な機会となりました。

また、会場に集まった12名は3つのグループに分かれ、短い時間ながらも活発な議論を展開しました。新型コロナ対応などを通じて多くの人々が経験した「いち早く知りたい」と「必要な情報が欲しい」という板挟みの悩みを共有し合い、情報活動をめぐる課題について理解を深めました。

研修は約3時間半にわたり、あっという間に終了しました。普段は交流の少ない参加者同士も打ち解け、新しいネットワークが生まれる場となり、今後の活動につながる大きな成果が得られました。フィールド研修においては、事前にホアビン総合病院から要望のあった3課題に対する介入策を提案する実践的な研修を企画・実施しました。グループワークではホアビン総合病院の医療スタッフと協業し、日越混成の3チームによるプレゼンテーションを行いました。また、JIHSの拠点病院であるハノイのバックマイ病院や地域の医療センターへも訪問し、ベトナムの医療体制を学びました。

国際医療協力局は今後も、各種研修やセミナー等を通じて、国際医療協力分野における交流や人材育成の推進に貢献してまいります。

\* IDES (Infectious Disease Emergency Specialist) : 厚生労働省が実施する養成プログラムを通じて養成される「感染症危機管理専門家」

国立国際医療研究所（NIGHM）では、毎年、若手研究員が最新の研究成果を発表・討論する「夏季リトリート」を開催しています。本リトリートを機会に臨床と研究のさらなる連携に発展することが期待されています。

本年は、8月25日（月）15:00～17:30にポスターセッション、26日（火）8:40～17:30に対面とリモートを併用した形式で開催しました。22題の口頭発表と27題のポスター発表が行われ、審査は参加者による投票で実施しました。開会に先立ち、満屋研究所長ならびに国土理事長より挨拶がありました。

採点投票の結果、最優秀賞には造血システム研究部の森川隆之上級研究員、優秀賞には熱帯医学・マラリア研究部の中嶋舞上級研究員、ベストポスター賞には脂質生命科学研究部の寺村侑研究生が選ばれました。表彰式では、満屋研究所長からの表彰と総評が行われました。



## 最優秀賞

### 「骨髄代謝・血流動態の変容に起因する加齢による造血幹細胞ホーミング障害の機序解明」

森川 隆之 上級研究員／造血システム研究部



この度は受賞の機会を頂き誠にありがとうございました。本リトリートでは多くの素晴らしいご発表の中、私共造血システム研究部の演題もご評価賜り大変恐縮しております。どの演題も深い知識と高度の実験技術に基づいた研究をされており、改めて国立国際医療研究所の若手の高い研究レベルに気づかされたと同時に、それを支えて下さっている、動物施設、共通実験室、そして事務系の皆さまの日々のご尽力に改めて感謝申し上げます。いただいた賞に恥じぬよう、この恵まれた研究環境を生かして造血幹細胞移植における様々な障害の克服を目指しさらに精進を続けて参ります。

## 優秀賞

### 「マラリア原虫のヘテロクロマチンによる有性生殖遺伝子発現制御機構の解明」

中嶋 舞 上級研究員／熱帯医学・マラリア研究部

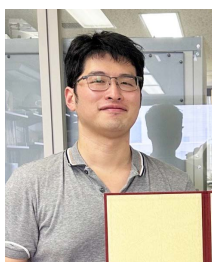


この度は、NIGHM 夏季リトリート 2025 において優秀賞に選出いただき、誠に光栄に存じます。私は今年4月よりNIGHMに着任し、マラリア原虫における有性生殖の分子機構の解明に取り組んでいます。今回発表させていただいたこの研究は、ポスター後に初めて自分で独立して立ち上げたオリジナルのテーマです。3年前にゼロから構想し、試行錯誤を重ねながら進め、やっと芽が出てきました。今回の受賞は、多くの先生方が本研究へ興味を持ってくださり、今後の可能性を見出しエールを送っていただけた証のようで、大変励みになっております。今後はNIGHMの環境を活かしながら、本研究を創薬はじめ医療応用研究として発展させ、マラリア根絶に貢献できるような成果を目指してまいります。日々楽しく研究できるのは熱帯医学・マラリア研究部の皆様の温かいサポートのおかげです。また、リトリートにて建設的なディスカッションをして下さった研究所の皆様にも心より感謝申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしく願いいたします。

## ベストポスター賞

### 「DHA リン脂質合成酵素 LPLAT3 は内耳シナプス小胞形成を介して聴覚に寄与する」

寺村 侑 研究生／脂質生命科学研究部



この度はベストポスター賞という身に余る評価を賜り、厚く御礼申し上げます。日頃よりご指導・ご支援を賜りました先生方、共同研究者、研究所の皆様様に深く感謝申し上げます。発表では、DHA リン脂質と聴覚の関係を示すデータをご紹介しました。これは近年注目されるようになってきました末梢聴覚と代謝の連関を示す重要な知見と考えておりますが、一部説明が抽象的に響いた点があり、今後の課題と反省しております次第です。有毛細胞に限定したリポドミクスの立ち上げと、動的指標の追加により、仮説を定量的に裏づけ、脂質リモデリングが聴覚機能に果たす役割をより明瞭にしていきたいと考えております。いただいた貴重なご助言を糧に、成果の論文化と次の展開へとつなげてまいります。

## 日本 DMAT 創設 20 周年記念式典が執り行われました

寄稿

危機管理・運営局 DMAT 事務局 山田 章人

10月13日、JIHSの主催により、日本DMAT（災害派遣医療チーム）の創設20周年記念式典が執り行われました。記念式典には、国会議員、関係省庁、医療・福祉をはじめとする関係団体、被災地等の自治体、学会、NPO法人、そして全国各地の医療機関等で活動するDMAT隊員・関係者ら200名以上が参加しました。まず、主催者として国土交通大臣が挨拶し、DMAT事務局がJIHSに加わったことにより、さらに実効性のある健康危機管理体制の構築に寄与することへの期待が示されました。続いて、参加した各界代表より祝辞をいただくとともに、DMATと我が国の災害医療の推進に特に顕著な功績を挙げられたDMAT隊員への功労者表彰が行われました。

次に、小井土雄一DMAT事務局長より、「日本DMATの歩み」と称し、DMAT誕生の経緯、20年間の様々な災害現場での活動、教訓や課題を踏まえたDMATの運用の変化と進歩、JIHSの一員となったDMAT事務局の今後の展望について報告がありました。そして、大友康裕国立病院機構災害医療センター院長より、DMATの創設者、故・辺見弘災害医療センター元院長の遺した多大な功績が紹介されました。

最後に祝賀会が行われ、参加者が和気あいあいと歓談を楽しむなか、武井貞治理事の閉会の挨拶とともに盛況のうちに式典の幕が閉じられました。



# 国立感染症研究所の戸山キャンパスと 村山キャンパスで「一般公開」を開催しました

寄稿 国立感染症研究所 広報運営委員会（戸山・村山）

国立感染症研究所では、一般の方や関係者を対象に研究所の存在と役割についての理解促進や活動内容等をお知らせする目的で、戸山キャンパス（東）と村山キャンパスで、年1回「一般公開」を開催しています。

今年度は、7月26日に村山キャンパス、9月15日に戸山キャンパス（東）で開催し、両キャンパス合わせて864名の来場者がありました。

各会場では、来場者が実際に実験器具を使っての実験、感染症に関する講演やクイズ、科学実験ショーなど、様々なイベントが行われました。当日は、多くの子どもたちや家族連れが来場し、「楽しかった」「来年も来ます」といった嬉しい声をいただきました。国土理事長、脇田副理事長、武井理事も参加し、賑やかで盛況な1日となりました。

## 村山キャンパス 一般公開（7月26日）



「涼」を感じる科学実験ショー



ミニ科学実験室

## 戸山キャンパス（東） 一般公開（9月15日）



肝炎クイズ（肝美ちゃんも参加!）



バイオセーフティラボ体験



企画・発行  
国立健康危機管理研究機構 広報管理部  
〒162-8655 東京都新宿区戸山 1-21-1  
TEL : 03-3202-7181（代表）  
URL : <https://www.jihs.go.jp/>



バックナンバー  
こちらから  
ご覧いただけます

